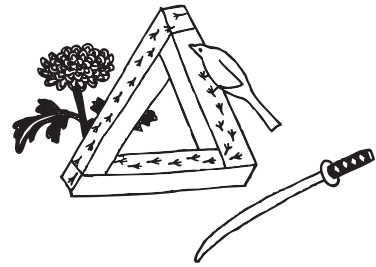




特別 Column



お大師様を訪ねて (2) 菊と刀

日立や富士通などのメーカーがバブル時に、アルゴリズムやOSなどのコンピュータサイエンス (CS) を学んでいない大量の文科系学生を採用したことが現在のソフトウェア業界の空洞化の原因であるとは慶應義塾大学の大岩元名誉教授の持論であり、実のところ私も富士通 (株) にいたとき、地方国立大学の文科系学生を相当数採用したことがあるので先生の見解は一面正しいと思う。

業界が大量採用に至った切っ掛けの1つは、1980年代に通商産業省がソフトウェア技術者不足の見通しを解決する施策として、UNIX系の部品化を推進するΣプロジェクトを立ち上げ、その中心としてIPAを作ったことである。ソフトウェア技術者不足が部品化で解決するという一考察を適当な理屈を付けて国家プロジェクトを立ち上げてしまうのは如何にも官僚のやりそうなことであり、結果として親方日の丸の官製プロジェクトは失敗に帰したが、IPAはその後も存続し業界への税金配布団体となった。このことに代表されるように官僚には「決算」や「反省」という言葉が欠如しているのは本当に嫌になる。Σプロジェクト失敗の結果ソフトウェア技術者不足という言葉だけが残った。

もう1つの切っ掛けは、1960年代に米国の戦略コンサルティング会社ボストンコンサルティンググループによって経験曲線 (experience curve: 生産量が倍になればコストは半減する) が提唱されたことから、製品のシェアが倍になればコストは半減すると各社が勘違いして市場拡大戦略を取り、工学部学生の大量採用競争に突入し、やむなく地方子会社での文科系学生採用に至ったことである。採用時の謳い文句として、「数学や物理を勉強していなくても大丈夫です。論理的な思考能力さえあればプログラムは開発できます」と何度も面接で言ったことがとても恥ずかしい (Ruth Benedictは「菊と刀」で日本は恥の文化と言っていたけど・・・)。プログラマ予備軍を大量採用したメーカー子会社に対しメーカー本体は仕事を発注せざるを得ず、その結果自分は管理業務と称する雑務を行いプログラミングの現場から遠ざかった。子会社は地元取引先に発注し、やはり管理業務に専念することとなり、結局メーカーのプログラマはプログラムを開発しなくなり、実力がどんどん低下してしまったのが空洞化の原因である。

こうして出来の悪い人間の作ったプログラムから無尽蔵に発生するバグの管理を出来の良い人間が行うというパラドックスが日常となった。

湖東俊彦 (日本信頼性学会)